

日本人と「神様」信仰を考える

— 「式内火男火賣神社史」補稿（二） —

大野 保治

私の住む朝日（大字鶴見）火売町に鎮座する氏神様が創建千百五拾年祭を迎えるので、その祝賀記念に「神社誌」の執筆を、と頼まれた。

当社社の責任総代の一人として、また郷土史の研究にかねて興味を抱いていたので、専門外ではあるが、お引き受けすることにした。

今年春祭（平成十二年三月二十六日）、どうやら上梓（じょうし）することができた。当日、千人近い氏子たちの参拝もあり、盛大裡に祭典が執行されて感謝している。

今、その記念誌を手にとってみると「ゲス（下衆）のあと知恵」というか、あちこちに意に沿わぬ箇所や隔靴（かっぴ）搔痒（さうよう）といったところもあって、汗顔の思いをしている。

そこで、本誌上を借り「補稿」として拙文を掲載して頂いた。会員の皆さんのご批判・ご教示を願いたい。

— はじめに当たり

執筆中、私の脳裏を離れなかったのは、①ほとんどの日本人が信仰している「神道」が、果たして宗教といつてよいものかどうか、②日本人にとって伝統の「神」とは何か。また、その内容はどのようなものか、③日常生活で、神とどうかかわりあっているのか、等々の課題であった。

（一）日本人の「神様」信仰

日本人の多くが信じている「神」と、それを祀る神社を最も身近に感じるのは、説くまでもなく正月早々の初詣でのときであろう。

当火男火賣神社（鶴見権現社とも）にあっても、逐年

参拝者が増え、年の夜から新年早朝にかけて、表参道を数列に並んで埋め尽くす。

新聞の報道によれば、国内で最も参拝者が多いのは東京の明治神宮で、その数はざっと四百万人近いとか（正月三カ日）。全国では、推定数千万人を優に超えるのではないか、といわれている。

想い出されるのは昭和二十年（一九四五）終戦後、しばらくは全国の神社は荒廃し、参拝人も少なかった。往時を偲び、感慨を禁じえない。

かつての神国・日本の歴史は、未曾有の無条件降伏・敗戦の憂目に遭い、この世に「神も仏もあるものか」と体験者はうちひしがれた。敗戦の諸々の要因を科学的に究明することもなく、焦土に立って国民は、ひたすら「生きる」ことに精一杯であった。

（一） 「神」——まず、信じること

日本人にとって「神」の問題は、意識（認識）よりそれを信じる宗教的感情や行為（宗教心の発露）のほうが重要ではないか、と私は考える。

——一般に、世の神は靈界にあり、目に見えない時間・空間を超越した超自然の存在である。それは哲学でいう形而上学（けいじょうがく）の領域に属し、個々の人間の「信教の自由」（憲法第二十條）の心の問題である。

先の初詣での人たちに「神を信じるか」と質問しても、大方は「今さら、そんなこと」「よけいなお世話だ」「信ずればこそ参るのだ」と言われそうである。

ほとんどの日本人は、神々の存在を意識的に信じなくとも、神社には「神」が実在することを前提に、神式の作法で二拝二拍手（宇佐八幡—四拍、伊勢神宮—八拍）一拝をする。

祭礼には御輿（みこし）を担ぎ、神霊には御賽銭を献ずる。そこには宗教上の形を超えた（形而上）ものとして、神と人間との深い交流がある。こうして人は「神」に感謝したり、祈願したり、また奉仕したりするのである。それは欲得をはなれた神・人一如の姿ではあるまいか。

一神教の国民には、このような日本人の「神」信仰は異様に映るらしい。八百万の神々を信じ、一方では、死者の靈を「仏陀」として仏壇に祀る。盆・正月には家

靈の供養に励む。神国・日本が表の顔であれば、仏教国・日本は裏の顔であろう。

その意味で、世界の宗教国の中でも日本は特殊な宗教の国であり、またそれに照応する国民性も、容易に理解しがたい精神構造の複雑性をもっているといえる。

参考までに、日本人の「信仰心」をみよう。

―ある新聞の国民意識調査によると、「あなたは宗教を何か信じていますか」の質問で「信じている」は三人に一人、三三・六%であった。

この点、創唱宗教で世界三大宗教の一つと言われているキリスト教圏の欧米諸国では、九〇〜九五%というから、日本人のそれは極端に低いといつてよいだろう。なお、「何教を信じているか」では、神道は四・三%と著しく低くなっている。ここには宗教をどう理解しているか、の本質的問題がひそんでいるように思う。

日本人の信仰心は複雑な構造をしており、初詣や誕生・七五三・入学祝・地鎮祭・家敷祭・交通安全・山(海)開き等々は神道、結婚式も最近では神道よりキリス

ト教の教会結婚が増えており、現世利益（りやく）は新興宗教に、葬式は断然仏教でといった具合に、諸宗教を一定のルール（原理）にのっとって受けとめている。

このような複雑な精神的構造も、自分たち日本民族の基底宗教として、その中に成立（既成）する宗教―その中核は「神道」であり、また「仏教」であろう―として位置づけて受けとめているのである（宮家準「日本の民族宗教」）。

二 「神」の実体と神道（しんどう）

「神」、そして「神道」とは、そもそも何か。

このような設問に答えることは、実は容易ではない。神職家やその関係者に尋ねても、即答できないのではあるまいか。

本来、このような事は、神に奉仕する神官の課題であろう。だが、その日常は、祭祀の執行と神社施設の維持管理に追われ、そこまで研鑽を積む余裕など無い、というのが実状である。

世界の三代宗教といわれているキリスト教、イスラム教、それに仏教にはそれぞれ聖典があり、教義が備わっている。わが神道には、それらしきものは無い。これまで日本の社会が、それらを必要としなかったからである。このような点から、日本の神社神道は、世界の中でも「特殊な宗教」といってよいだろう。

キリスト教やイスラム教のような一神教を「言葉の(による)宗教」と呼ぶなら、神道は強いて言えば「直観(感性)の(による)宗教」と呼ぶこともできよう。

日本人の神々に寄せる信仰は、日常生活の構成要素(生活の一部)として溶け込んでいるのである。その信仰の昇華は、西行法師(鎌倉初期の歌僧、一一一八—一一九〇年)が伊勢神宮に参拝した折に詠んだという「短歌」に尽きているように思う。

何ごとのおわしますかは知らねども

かたじけなさに 涙こぼるる

(一) 国学がとらえた「神」

徳川幕府が創建され、平和で安定した社会が実現する

と、幕府は学問を奨励した。

漢学(儒学)の主流は、封建的身分制の体制イデオロギーの学、朱子学と、これに批判的な陽明学である。それに遅れて長崎を経由して伝わったのが蘭(洋)学、すなわち医学・兵学・天文学・数学・化学などの実用科学の類であった。

これらに対抗する形で勃興したのが「国学」。古事記や日本書紀、万葉集などの古典に日本固有の文化と精神を究明しようとしたのである。

その代表者は本居宣長(伊勢松阪の人、一七三〇—一八〇一年)である。本居は、その書齋「鈴の屋」にこもり、「神とは何か」を瞑想した。こうして書き上げたのが『古事記伝』であった。

およそカミ(迎微)とは、古の御典等に見えたる天地の諸々のカミたちを始めて、それを祀る社に座す御霊たちを申し、また人は更にも言わず、鳥獸草木の類、海山などその他何にまれ、尋常ならざる勝れたる徳のありて、畏むべきものをカミ(神)とは言うなり。

と。彼は、神のイメージ（觀念）を包括的に把握した上で「徳の勝れた畏むべきもの」と認識している。

本居の「学び心」は、哲学で論ずる形而上学の領域に属し、超自然的現象である神に対して思惟の所産ともいうべきものであった。

近世哲学の祖、デカルト（フランス人、一五九六—一六五〇年）が、「我思う、故に我あり」と叫んで、自我の確立を実感した。デカルト流の思弁によるなら、「我」神（を）思う、故に神あり」ということになるだろう。

かつて戦時中、われわれ戦中派は、軍隊で「（勝利を）信じる者は強し」（戦陣訓）と、非合理的で神懸かり的な精神主義をたたきこまれたものである。

（二） 「神」の実体とその箴言

古来、わが国は、「言靈ことたまの幸おう国」とも、また「言挙げせぬ国」とも言われてきた。

われわれの祖先は、言葉にも靈魂が宿っていると信じ慎重に使い分けた。今年春、選挙を前にして森総理大臣

の「神國、日本」の発言が、国を挙げて論議を呼んだのも、記憶に新しい。

政治家が汚職などで責任を問われると「私はカミに誓ってウソは申しません」とうそぶく（日本には八百万のカミがいるので、どのカミに誓ったのか？）。経済人も、また「苦しい時の神頼み」と神を利用する。若い世代もまた「この世に神も仏もあるものか」とばかり、新聞紙上を騒がせる。これでは、神様こそいい迷惑、というものである。当世は、まさに「神」の存在しない「穢れけがの国」に墮落してしまったようである。

確かに、日本人が不用意に使う「神」の語意は、多義的で、明確性を欠く。そこで、神の定義（概念の構成と規定）を辞典でしらべてみた（広辞苑）。

①人間を超越した威力を持ち、人間に隠れた存在。

それは人知をして測ることの出来ない能力を持ち、人類に禍福をくだすと考えられ、また信仰の対象となるもの。

②日本の神話に登場する人格神。

古事記（三）——「天地初めて開きしとき、高天原に成

れる神の御名は……」

③ 最高の支配者、天皇をいう（注 戦前、天皇に使った尊称「現人神」とは、隠れ身の神が人の姿となつてこの世に現れたのが天皇、とする）。

万葉集（三）―「大君は神にしませば天雲の、雷いかづちの上におりせるかも」

④ 神社などに奉祀される霊、神霊。

⑤ 人間に危害を及ぼし、怖れられている存在。

① 雷や風神の類 ② トラ・狼・蛇・キツネなど。

⑥ キリスト教で、宇宙を創造し主宰する存在。

全知全能の絶対者。上帝、天帝のこと。

以上のように「神」の概念を六通りに分類し、明確にしている。前述の森総理の発言内容は、このうち②③④に該当すると考えられる。

つづいて、日本人が日常的に使用する箴言しんげん（格言、教訓）にも、よく「神」が登場する。

その含意は、深く神の本質にかかわっているように思う。日本人たる者、常日頃の行為規範（行動基準）として肝に銘ずるべきものであろう。

・ 正直の頭くちに神宿る（神々は正直な人を加護し給う）
・ 神は非礼を受けず（神は礼儀にはずれたような物は受理しない）

・ 神は敬するに威を増す（神は人が尊敬することによって貴とさを増す）

・ 神は見通し（神はどういうものも御覧になっていて、偽ることを許さない）

・ 神ならぬ身の知る由もない（神のように全知全能でない、無力な人間の身だからとの意味）

・ 神の正面、仏のま尻じり（神棚は正面に、仏壇は陰に設けよ）

・ 神も仏もない（苦痛・つらさの連続で、救ってくれるはずの神も仏も現れない。懸命な努力や忍耐が報いられないときの言葉）

（閑話休題）

想い出されるのは六十年前、支那事変

の頃、中学の漢文教師（確か榎本といった）の授業で「公務員にこっそり賄賂わいろを贈ろうとした男に「天知る、地知る、汝知る、我知る、いづくんぞ知らんといわんや」

と戒めて返した話である。

今、一つ。これも中国の故事。「天網恢恢、疎にして漏らさず」。天空に張りめぐらされた網目はあらいが、天神は悪事を見逃さない、の意。教師いわく「君たち、悪い事をすれば必ず捕まる。監獄行きを覚悟せよ」、「これらの格言を忘れず、もって座右の銘とせよ」と。(注、後者の古訓は「老子」第七十三章に見える。「広辞苑」

(三) 神ながらの道と人間の生き方

―わが心に「神」を取り戻そう―

神の御心に添う(神意を大切にす)「惟神(かんながら)の道」の語義も、判ったようで判らない不明確(非限定的)な概念である。

再び辞書をひもといて見る。―「日本に神代から伝わってきた、神意のままて人為を加えない日本固有の道、すなわち神道」と出ている。

なるほど、言葉の上では、このような説明になるのであろう。しかし、客観的に、かつ正しく「神意」を探知することなど、どうして可能であろうか。神は隠れ身で、

生き身ではない。そこで、原始古代人が頭の中で創出した思考類型が「シャーマン」ではなかったろうか。

シャーマンとは―神や精霊、死者の魂などと直接に交流し、託宣(ご神託)や予言、病気の治療などをおこなう職能者のことである(沖繩の巫女)。

なお、「人為を加えない」の意味内容は、容易に理解できよう。

それは、作意(害意)や策略をめぐらし、人を欺いたり、人身を殺傷したりするなど「人倫の道」に背くような反社会行為をするなかれ、の意である。

法律の領域では、「信義誠実の原則」(民法第一条)や刑法上の「破廉恥罪」(窃盗罪・詐欺罪・贈収賄罪など)の行為が、これに該当しよう。

なお、忘却してはならないのは、農耕の生活協同体社会の中で形成されてきた戦前の淳風美俗―「和」の協調性、犠牲的奉仕の精神、感謝の心など―である。GHQ(占領軍総司令部)が戦後、「日本の民主化」を推進しようとした時、一部のスタッフ(学者)には「戦前の日本社会の家族制度には、米国人の見習うべき点が少なく

い」と高く評価したという資料も残されている。

敗戦後、五十五年。ミレニアムの西暦二〇〇〇年、日本社会は「神意」に添わず、「神威」をも怖れない穢れの国に墮落したように思われる。

国民の代表であるべき政治家から、法と正義を守るべき警察官、また次代を担う青少年に人間の「生き方」を指導すべき教育者まで、「神」の存在を忘れた国家になり果てているように思われる。

(四) 神と人間との関係

日本伝統の「神」(神道)と人間(世界)との関係は、不則不離で相互に交流・交感しあう信頼関係に立っていると考えられる。

中国(漢民族)では、古くから陰陽道の伝統宗教「道教」があつて、二元的観念論の思弁の学が発達した。神にも善・悪の二神が存在し、臨機応変に、また自由自在に変化するとした。神の特性もまた人間と同じく喜怒哀楽を解し、酒を愛し、歌舞音曲・詩歌を愛好する。このように日本の「神」は極めて人間的である。

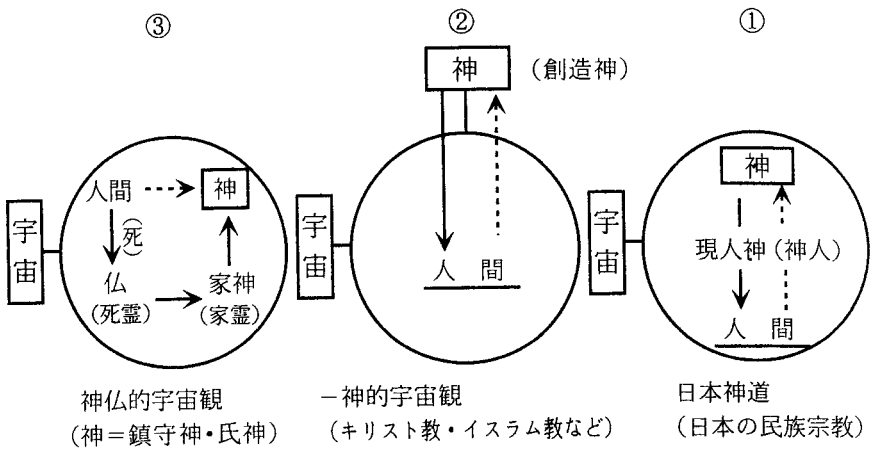
平和(秩序、正義、人の和など)を愛する神は、一面では不正・不浄・穢れ、とりわけ人の死を忌み嫌う。そこで原始人(弥生人)が考えたのが「御祓」であり、これを通して神の御心「明き、淨き、直き心」に心身が清められる、とした。以前は、祭典にかかわる人は「みそぎ」(禊はミソソギの約、川や海に入り身を洗い清める)をしていた。その他、手水や塩(とくに葬儀のあと)を使う習俗は、現在も生きている。

また、神を楽しませるとする祭典時の「神楽」で、御面を被るのは、どこから来たのであろうか。

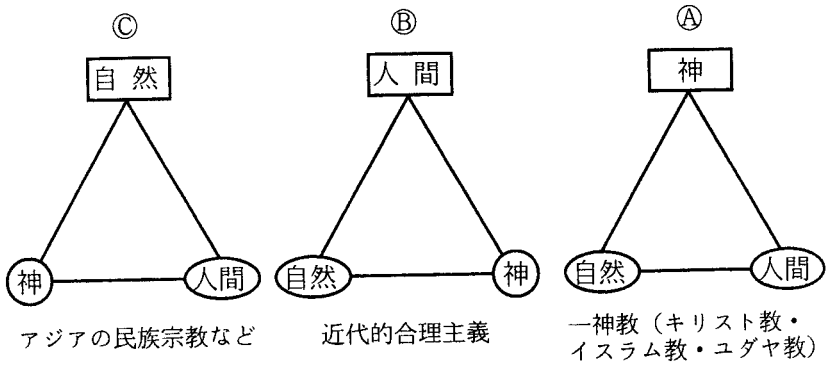
思うに、神の特性の二面性(神の顔と人間の顔と)を現すのではなからうか。仏の里、六郷満山の寺々での祭り(修正鬼会など)にも種々の面を使うが、この行事も、元は祭礼の神事から出たものとされている。

私は門外漢ながら、世界の神々と人間世界との関係を〈モデル概念図〉として作成してみた(次頁)。

第一図―日本の神道のそれであり、神と人間と同じ人間世界の次元で共存していることを示す。第二図―一神教の宗教的世界観で、神は人間世界を超越した存在



世界の宗教的宇宙 (世界) 観



宇宙 (世界) の構成要素図

(絶対神)を示す。第三図―仏教的世界観で、人間―(死)―仏―家祖靈―神(鎮守神、氏神)は、人―「神への輪廻のシステム」(体系)を意味する。

第三図については異論も出そうなので、来年度の拙稿で論述したい。

なお、A・B・Cの画く図は、「神」「人間」「自然」の三位(者)構成の概念図であるが、紙幅の都合で、ここでは深入りしないことにする。

三 沖繩での「神様」信仰

仏教が伝来する(六世紀)まで、日本固有の神祇信仰の実態は、どうであったのだろうか。

その原型なり、原風景が、沖繩の島々に残っているのではないか、というのが私のかねての構想だった。

その理由は―沖繩の人たちが現在使っている言語「琉球語」に、そのナゾを解くカギがあるように思えたからである。

実体なり歴史的真相が秘められているケースが少なくない。我が国は「言霊の幸おう国」でもあり、そこに神の啓示といったものを感じたからである。

―日本語の起源―

そこで、語学の専門書(大野晋著『日本語の起源』)をひもといてみた。先の点で、関連のある二項を取り上げて見ることにする。

①第二次大戦後、語学研究者の調査で判明したところでは、日本の大和時代の言葉にインドネシア系(ポリネシア語)を主体とした言語が多い。

この島國に縄文時代から弥生時代(前期)に住んでいたとされる大和民族の祖先(原日本人)に、北方アジア系(中央アジア)のアルタイ系民族が蒙古高原から旧満州、朝鮮半島を経て渡来した。

一方、南方インドのタミル系民族がフィリピン、台湾、中国沿岸、沖繩を経て稲作等の農耕文化をもたらした。こうして日本の土着文化に南方と北方から新文化が伝来し、混然融合して現在の日本文化の原型が形成された、

とする。

②日本語と間違ひなく同系語といえるのは、唯一つ「琉球語」である。

その論拠として、言葉の語順、母子音、代名詞・動詞・形容詞の活用などは、まったく日本語と変らないからである。また、日本語と琉球語とが分かれたのは、恐らく弥生時代（後半期）ではなかったか、と推測されている。

私見①について。この内容は、明治期から唱えられていた。高天原の伝承神話や国技である「角力」にかかわる言葉（神祭りの御輿の掛け声「ワッショイ」または「ワッシー」、角力の「ハッケヨイ」などは朝鮮語の古語とされる）も、よく知られている。

②について。筆者は「なるほど」と思い、「そうだったのか」と感じ入った。

沖縄の人たちは、現在もなお、日本（内地）をヤマト（大和、魏志倭人伝では「倭国」といい、日本人をヤマトンチュー（大和の衆、であろう）と呼んでいる。

往時、日本の国名ヤマトは、現在の奈良県天理市地域から起こり、当初は「倭」の漢字を充てていた。元明天

皇（七〇七〜七一五年）の御代、国名は二字にせよとの詔勅で「大和」に代えられた（和名抄）。

何年前か、沖縄で海洋博覧会が開催された。その折りのキャッチ・フレーズ「メンソーレ」（いらっしやい）は、奈良朝時代の古語「面候え」（候は、「おります」の丁寧語）と記憶している。

この他にも、沖縄地方には、王朝時代の古語が多く残っているようである。つづいて、沖縄での「神様」信仰に話をすすめよう。

— 沖縄地方の「神々」 —

民俗学と民族宗教学の著作を中心に、何冊かひもといてみた。その結果、沖縄の神祭りに日本の神祇信仰の原型（基本宗教）なり、原風景が見られることが判明した。以下、三点について述べてみよう。

（一）ウタキ信仰と「ノロ」（巫女）

沖縄では「ウタキ」の言葉に、漢字の御嶽（岳）を充てている。日本語のオタケ（又はオンタケ）がウタキに

転じたのである。

このウタキの語意は、「聖なる場所」で、転じて「神」をもう。聖なる神の森には、ガジュマル等の自然樹が生い繁り、神苑には香炉石（火炉）が並べられて火祭りの場所に使う。

また、地方（島嶋）によっては、ウタキとは呼ばず「ウガンジュ」ともいう。ウガムは日本語の「拝む」であり、拝み所は即ち「遙拝所」であることを知った（記念誌二二頁参照）。沖縄地方に、このような大和言葉が今なお生き続けていることも、驚きであった。

なお、ノロ（巫女）について。ノロは神祭りの際の女性司会者をいい、語源は「祈る」「宣る」に由来することも知った。

宗教儀式のリーダーが女性であることも、沖縄の特徴であろう。邪（耶）馬台国の時代（三世紀頃）、その女王「卑弥呼」が魏志倭人伝に「鬼道に仕え、民を惑わす」と記されている。このような儀式にかかわっていたのかも判らない。



(二) ニライカナイ信仰

この民俗信仰は、古来沖縄で旧正月に新しい神が南方から渡来し、人々（家々）に「幸福」と「豊穡」（繁栄）をもたらすと信じられていた。

また一方では、現世の人が死ねば、海の彼方の聖地に還るとされた。遠い祖先が南方系帰化人であったとすれば、生も死もその「魂のふるさと」に還る、と信じたことも納得できる。

（現在も仏教では、盆と正月に祖霊がわが家に還ってく

ると信じられている)。

(三) オナリ信仰と「ユタ」

沖縄で、女の姉妹が男兄弟を靈的に守護するというのが、この信仰である。「オナリ」は姉妹の靈威をいい、兄弟(エケリ)に対して靈的に優位に立つという思想である、といわれる。

沖縄では昔から、村々の草分け的な家系はネーヤ(根屋)と呼ばれ、ネーチュ(根人)が村の政治的権力を握り、その姉妹がネーガン(根神)となつて宗教的儀式を取り締まっていた。

ここに、筆者は、古代国家の「祭政一致」の原型を見るのであるが、どうであろうか。耶馬台国を支配した女王「卑弥呼」の政治と関係がありそうである。

つづいて「ユタ」について。

このユタは、口寄せ(神懸かりとなつて靈を呼び寄せ、神意を伝える)のできる呪術師のこと。宮古島では「カムガカリ」(神懸かり)、八重山諸島では「カムピト」(神人)と呼んでいる。

このユタには、誰でもすぐになれるものではなく、「そうなるべく生まれて来たもの」として先天的素質が要求される。また、ユタになるためには、かなりの修練が必要とされる、という(『民俗学事典』その他)。

(四) 常世の国のこと

筆者の、これまた、かねての疑念は「常世の国」の由来であった。この呼び名と「根の国」「夜見の国」「黄泉の国」とが、どのような関連性にあるのかの問題でもあった。

そこで、今回も辞典の世話になる。

・根の国—地下深く、また海の彼方など遠くにあり、現世とは別にあると考えられた世界。死者が行くとされた。よみの国。古事記(上)に「正に遠く根の国に適ね」と見える。

・夜見の国—黄泉の国に同じ

・黄泉の国—中国で地の色を黄色に配することから、という。地下深くにある泉。死者の行く所。よみ、冥土のこと。

・常世の国—常世とは、常に変わらないこと、永久不

変であること。古代人が遙か海の彼方にあると想像した国。不老不死の仙境、死人の国。

「常世の神」とは、常世の国から来て人間に長寿と富（繁栄）を授けるとする神（渡来神）。参考までに「歳徳（繁栄）神」とは、曆注にある一つで、その年の福徳を司る神のこと。この神のおわす方角を恵方と呼び、万事に「吉」とする。

縄文時代、日本では、死者をカメ棺などに入れて土葬した。そこで、死者の魂の行くところは「根の国」（根は、木の「根」であろう）と想定したことが考えられる。古事記の初頭にも、イザナギノ尊がお産で死んだ妹イザナミノ尊を追慕して「黄泉の国に追い行き」とある。この国は、現し世の人の行ってはならぬ「穢れの国」でもあったのである（「記念誌」五〜六頁）。

中国でも、紀元前千五百年頃「殷」の時代は土葬であった。黄土層の地底深くには「泉」があり、その近くに葬られた死者の魂は地霊の神威にふれて再生できる、と信じられていたようである。

以上、四つの国の呼称は、国・民族を問わず、原始人が死ねば行く世界として、ほぼ共通の認識をしていたことがわかる。現在、葬式の弔辞には、多く「黄泉の国」と「天国」を使う。天国の思想は、周知の通りキリスト教での死後の世界の概念であり、年輩の人たちは前者を、若年層は「天国」を主に使っている。

参考までに、日本固有の神道では、その墓所を「奥つ城」（又は「奥つしろ」と呼んでいる。死ねば「神」（祖霊神）となり、神霊の鎮まる所の意である）

さて、主題の「常世の国」であるが、領土の狭い島国日本では、多くが農民として農村に住む。他は、山間部に住む山部と海岸部に住む海部に分けられよう。私見ながら―農民と山部とが「根の国」なら、漁村の海部に属する人たちは「常世の国」を信じ、それが前節に述べた沖繩での「ニライカナイ信仰」ではなかったろうか。筆者には、そう思えてならないのである。

（閑話休題）

戦前、子供を対象にした「お伽噺」で人氣のあった

のは、南方遠くの海の物語―「浦島太郎、乙姫様」(浦島伝説、お伽草子)と、片や天空高い月や深山の仙境の物語「かぐや姫」(竹取物語)、「羽衣」(羽衣伝説)、「ちかちか山」(室町時代の勤善懲悪の寓話)、「桃太郎」(同上)などであった。

現代は科学万能、技術社会、合理主義、実利主義の世相である。昔話のような非現実的で非科学的な「夢物語」は子供に人気がなく、凶悪な殺人ドラマ、怪奇なホラー(恐怖)番組や空想物語などテレビ・ゲームに夢中になっているのではあるまいか。

四 古代人の生活―倭国の人たち

中国で今から約二千年前、魏の時代(黄河の流域に建国、紀元二二〇―二六五年)に書かれた歴史書「魏志倭人伝」(東夷の條)は、日本古代史に関して是最古の資料である。

そこに登場する「耶馬台国」と、その女王「卑弥呼」をめぐっての記述は、現代人に歴史へのロマンをかきた

てて止まない。その位置をめぐって九州説が盛んになると、九州の各地から、およそ三〇の町村が名を上げたとという。

ここで深く立ち入る余裕はないが、当時の倭人たちの生活振りを、この文献から垣間見ることにしたい。

―倭国人の習俗と風土―

難解な漢文を意識し、日常生活で興味を呼ぶ個所のみ取り上げる(富来隆「卑弥呼」ほか)。

①その風俗は、礼儀正しい。男は髪をみづらに結び、



倭国の使節

頭を布地で巻いている。着物は布地のままで身体に巻

き付け、その端を結び合わせる。

女子は、髪を束ねて頭にのせる。その着物は、一枚の布のまんなかに穴をあけ、そこから顔を出している。

履物は、はかない。

②死者を葬るときは、棺に入れる。それを覆う外箱はない。そのまま土中に埋めて塚をつくる。死者の家では十数日間、喪に服する。その期間は、肉類を食べない。

喪主は大きな声で泣き、葬儀に集まった人は酒を飲み、歌い踊る。葬儀が済むと、家人は全員水に入って身体を浄める。

③村の集会などでは、父子男女に区別はしない。倭人はみな酒を好み、はだしで歩く。身分の高い人には尊敬の念をいだし、拍手かじちをうつ。また、妻を四、五人もつが、身分の低い人でも、二、三人はもつ。

女性は貞操を重んじ、焼餅を焼いたり、夫を嫌がることはしない。

④女王国は、もと男性が治めていた（一八〇年頃か）。だが、国が乱れて戦争状態になったため、合議した上で、

女王に位を譲った。それが「卑弥呼」だ。

女王はかなり年をとっており、夫がなく、弟が治めている。彼女は不思議な神に仕え、呪術を使って民衆をひきつける。侍女は約千人いて、挨拶や説明には膝を曲げて両手をつき、慎しみ敬う。返事には「あい」（注、「はい」であろう）と答える。

⑤倭人には、大人だいじんと下戸げことがある。下戸は路上で大人に会うと、道路の草むらに避け、地面に両手をついて、うやうやしく迎える。

女王国の北の国々には、一大率いちだいらうと呼ぶ役人がいる。一大率は伊都国（注、今の福岡市西方の半島にあった小国）で政務をとり、国々に監督官を置いて政治の様子を報告させる。

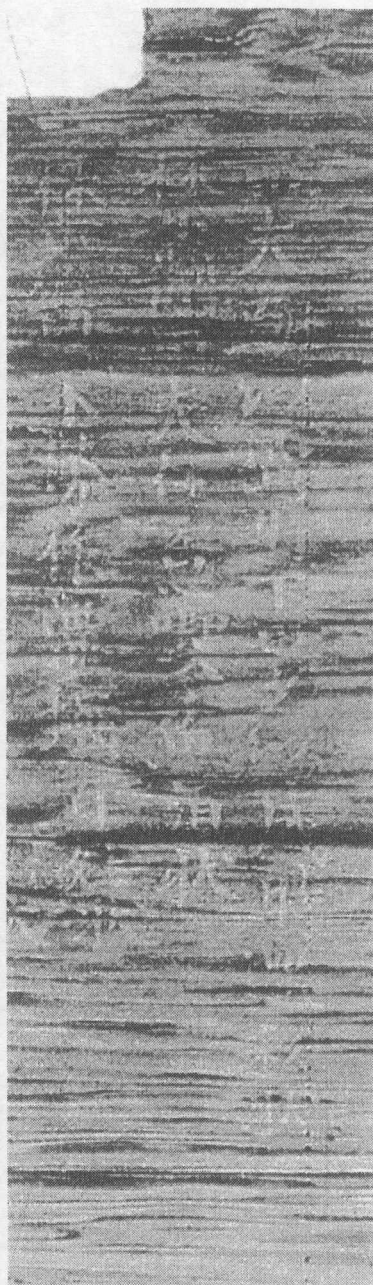
卑弥呼がこうして死んだ。死後、大きな塚（注、古墳のこと）を築いた。差し渡しは百余歩もあり、女王は盛大に葬られた。そのとき、百余人の奴隷が殉死した。

そのあと、男子を立てたが国中がこれを承服せず、相争って千余人の死者を出した。そこで、卑弥呼の世継ぎの娘で十三歳の台与とよを立てて女王にした。

中国人は古来、広大な風土の大国であることからか、針小棒大に物事を表現する。よって大ゲサ（たとえば④侍女は千人など）の箇所もあろう。だが、叙述の大部分はかなり微に入り細をうがち、鋭い目で当時の世情を観察しているように思われる。その内容は、ほぼ正鵠を射ているのではあるまいか。

はすでに織られていた。履き物は、まだ広く一般の人たちには普及していなかったのではあるまいか。
②について。葬儀の習俗についても、筆者に確言する知識も自信もない。

やや疑念を感じるのは、葬儀の参列者が果たして「酒を飲み、歌い踊った」かどうか、である。酒づくりも、



榜示札

私見①について。当時の倭人の服装は、記述のようなものであったろう。登呂遺跡（静岡市、昭和十八年発掘。弥生時代の集落跡）から原始的な織機（地機じばた）脚のない古型の布織機）が見つかっており、この頃、衣類

人類の歴史に早く登場した。古代エジプトやメソポタミア文明では、すでに「ビール」がつくられていた。

今年、夏のこと。石川県津幡町で発掘された遺跡（加茂遺跡）で「墨書立て札」が見つかった。

・田夫（農夫）は、朝は寅の刻（午前四時頃）から田畑に出て、夜は戌の刻（午後八時頃）まで働くこと

・村内に逃げ隠れしている逃散農民は捜して捕えること

と・農民はほしいままに魚や酒を飲食してはならないこと。・群酒（多数が飲酒する）に酔うて過ちを犯すなかれといった意味の漢字ばかりの「榜示札」が出土した。時代は邪馬台国建設より数百年経た平安時代前期（九世紀半ば）であったにしろ、我々の祖先は、やはり陽気で「酒好き」であった。律令国家の当時の治世の一端が偲ばれ興味深い。

葬式といえば、今日でも「おトキ」（お齋＝死者とのお別れの食事）の席に酒（焼酎）が出される。第二次大戦までは、ときに酒を飲んで歌ったり踊ったりしたという話を古老から聞いたことがある。

③について。当時、一夫多妻制の社会であったことは否定すべくもない。千七、八百年も昔のことで、ヨーロッパはいざ知らず、アジア諸国（部族）では、ほぼ同様の社会情勢であったと思われる。

周知のとおり、イスラム教（マホメット、六一〇～六

三〇年創唱）では、社会的弱者の女性救済のため妻を四人までめとることを許されていた。キリスト教伝来の折宣教師たちも、日本社会での「嬰兒殺」（墮胎）や「間引き」の因襲は強く非難した。が、この一夫多妻制は、それほどでもなかったように思える。

また、中国は（朝鮮も）つとに「儒教」の国で、集会にも礼節を重んじる。席順を考えず無秩序に席をとる倭人に無作法を感じたのであろうか。女性が「貞操を守り、焼餅をやかない」などの観察は、鋭い。もっとも戦後、民主教育を受けた若い女性はそうでなく、集会の場で堂々と自己主張をし、離婚にも、積極的であることは周知のとおり。

④について。話題の多い「邪馬台国」については、ここで詳しく述べる紙幅はない。

先掲「倭人伝」で、「鬼道に仕え、民を惑わす」女王の信仰は、前節に見た沖繩地方のウタキ信仰やニライカナイ信仰の原風景ではあるまいか。また、女王に接する応対振りも、今日の社交儀礼で、その精神が生きつづいでいるように見える。

⑤ について。農民に身分が発生し、社会に階層が生じたのは、いつ頃か。考古学者の基本的課題は、稲作（農耕）文化がいつ頃、どこから、どのような経路で島国、大和に伝わったか、である。

これについては、今日なお定説はない、という。考古学者の大方の考察では、縄文期中期か末期、長江（揚子江）流域か雲南省奥地から（或いは東南アジアのどこから）、海岸沿いに台湾・沖繩・朝鮮海岸などを經由して伝わった、とされているようである（それ以上のことは知らない）。

稲作耕作が日常的に定着する過程で、農耕社会に「身分」や「階層」が生じたであろうことは否定できない。

現代、中国の社会に「タイジン」（大人）の言葉が使われていることも、よく知られている。「辞典」にも①体の大きい人、②一人前に成長した人、③徳の高い立派な人、④身分や官位の高い人、⑤父や師匠、学者の尊称、と出ている。前掲「倭人伝」では、この中のどれを指していたのか（③の意味であろう）。

一方、「下戸」について。

律令制国家（七世紀半ば—奈良朝—平安初期）の社会では、四等戸に分けられていた。

・大戸 一戸内に八人以上の成人男子のいる戸。金持ち、大酒飲みをもう。

・上戸 一戸内に六、七人。婚礼のとき祝酒の瓶数から出た語という。大酒飲みの特徴。

・中戸 右に同じく四、五人。中位の酒飲み。

・下戸 右に同じく二、三人。酒が飲めない人。

徴発される壮丁（そうてい）の人数から「戸」の制度が生まれたが、これが現在では、酒量の大小になって「下戸」の語が生き残っていることに興味をひかれる。

⑦ について（⑥にはふれない）。

三世紀に中国・魏史に登場した日本の「邪馬台国」は、その女王「卑弥呼」の死でマボロシのごとく消え去る。魏の国が滅亡したのは二六五年。女王を「親魏倭王」に任命したのも魏王であった。

この後、日本の国の歴史は、大和朝廷国家の時代に入る。「古事記」「日本書紀」に記された大和朝廷成立の記録はあるが、その実証性は疑わしい、といわれている。

ある学者（斎藤忠元東大教授、考古学）によると、大和朝廷の最初の首長は第十代・崇神天皇ではないかとする（『日本人はどこから来たか』）。

戦前の皇国史観によると一紀元前六六七年、日向の国高千穂宮にあった神大和磐余彦尊（神武天皇）は、ここを出発して大和の橿原に宮をつくって即位した。それは、西暦紀元前六六〇年正月であった（『記紀神話』）。だが、これが、古い時代にさかのぼりすぎていることは明々白々であろう。

二、三世紀ごろ（考古学の上では「弥生時代」（後半）の国内、そして我々の郷土、鶴見郷はどんなであったか。――この頃、各地にムラがたくさんあり、各ムラには村長がいて、これらのムラの幾つかを支配した首長、あるいは豪族と見られる者もいた。人々が、彼らの首長を厚く葬るという思想（厚葬思想）があったことも当然考えられる（実相寺所在の「太郎塚」「次郎塚」？）。

ところで、「卑弥呼」の墓は「径、百余歩。殉葬する者、奴隸百余人」とある。直径（差し渡し）百歩といえは五、六十メートルになる（軍隊での一步の歩幅は七五

センチ。古代人の歩幅では数十センチか）。このことから、かなり大きな盛り土の方墳であったことが考えられる。「殉葬」とは、生き埋めのことである。

最近、全国各地で史跡が続々と発掘され、古代史に科学の光が当てられている。記紀の記述になる先の大和國家成立までの数百年も、深い謎に包まれている。古代史には、まだまだロマンが多い。天皇陵関係の陵墓は全国に八四九箇所、うち古代史関係は一二七箇所という（宮内庁）。この中に、女王「卑弥呼」の墓ではないかといわれるものが含まれている。筆者も市文化財調査員の一人として、天皇陵の学術調査を切望したい。

五 中国の古代思想とその伝来

日本の社会には、今日なお、中国大陸の古代思想（信仰）が日常的に生きています。それは遠く道教や儒教、ト占（占い）、陰陽道、干支（えと）の類である。その源流なり、歴史的背景を、ここで探ってみよう。

(二) 道教と神仙思想など

もともと「道教」は、黄河流域に住む漢民族の伝統的宗教である。約四千年の昔、中国の黄帝(伝説上の帝王)や殷帝(紀元前一六〇〇頃)を教祖と仰ぐ。のちに、老子(春秋戦国時代)の流れを汲み、その神祇信仰は、日本固有のそれによく似ている。

山嶽(神山)信仰のもとで呪術や祈禱をおこない、不老不死を目指した。仏教がインドから中国に伝わると、その教義をも採り入れてしだいに成長し、随・唐の時代(六〜一〇世紀)にその全盛時代を迎えた。

ここで、「殷墟」について一言。

今からざっと三千数百年の昔、栄えたという殷の国(都は「商」)は河南省安陽域の北部にあり、漢字の起源(甲骨文字)の研究のために「殷墟」が発掘された(一九三〇年頃)。

この時代の山嶽信仰は「天上に棲むとされる神々(天帝)の主宰神は「雷神」と信じられ、農作物の鍵をにぎる気象をつかさどり、戦争好きで、また荒れ狂う神(荒神)でもあった。地上の王たちは、この天帝の命により

革命を起こして天下を統治するとした。

地上の王は、天帝の意思を体して「宗廟」を建て、これを祀った。

その建物は、棟に千木を置き、天帝はこれを目当てに天降る、という。この宗廟には、祖先の靈(祖靈神)を祀る。地上の王は死ねば、天上の主宰神のもとに帰ってゆく。靈魂が身体から離れて空をさまよふとき、樟木と称する木片を振りまわして靈魂をとらえ、祭場に連れてくる。それが木主と呼ばれる「位牌」の起源である、とする。

この建物の棟に千木を置くという建築様式が神社建築の原型ではないか(出雲の「大社造り」、という。宇佐神宮に見られる「八幡造り」も中国の宗廟であり、日本で初めて創建された、とする見解もあるが、門外漢の筆者には断言する自信はない。

― 神仙(仙人) 思想について ―

中国のこの民間信仰は、山東省地方の神山思想に始まるといわれ、その祭神は神人(日本では「仙人」と呼

ばれる神通力を得たウルトラマン（超人間）と考えられた。

この「仙人」は深山に棲み、カスミを食べて不老不死の術をおさめ、神に仕えんとする架空の存在であった。このような道教の教えが遣隋使、遣唐使により仏教文化といっしょに日本に伝来し、大和・奈良時代に導入されて当時の宮廷や公家たちに信仰された。

この仙人思想は、日本の古典芸能の謡曲や能楽、また漢詩の領域にも登場し、日本人の「心」を今日に伝えている（貝塚茂樹編集『古代文明の発見』）。

（二）陰陽道（五行説）

陰陽説とは、どのような説をいうのか。

— 中国で陰陽五行説に基づいて天文、暦学、易学などを取り扱う術のことである。

古来、中国では、万物を「陰」と「陽」の相対立する二元（たとえば天と地、山と川（海）、元氣（健康）と病氣、男と女など）の力の働きと捉え、それを統一する

のが「太極」と考えた。

この発想は易学に始まり、宗学の宇宙観の中で重視され、宇宙の本体（万物生成の根元）と観念された。今日、太極拳は日本にも伝わり、身体・精神両面の鍛錬の拳法として大きな人気を集めている。

さて、日本で大和朝廷が成立（六世紀頃）し、律令国家となり大宝令が布かれる（七〇一年）と、外来の新思想が政治の場にも採り入れられた。こうして「陰陽寮」と称する役所が都に置かれ、中務省に属して天文、気象、暦、時刻、卜占などをつかさどった。

— 物忌（ものいみ）と方違（かたがえ） —
陰陽五行説に基づく当時の社会の習俗で、代表的なものといえば二つあり、「ものいみ」と「かたがえ」がそれである。

前者のモノイミとは、ある期間、食物や行為を慎み、身体を淨め、不浄を避けることである。一方、カタタガエとは、建物の方角や旅行などの選択で縁起をかつぎ、吉凶の占いで決めることである。たとえば方角選びでは、曆神の一つで十二神将の主将、ナカガミ（天一神）の座す方向は「凶」とした。

一方、「吉」の方角はエホー（恵方）と呼ばれ、正月に來臨する神、「歳徳神」の座する方向とされた。このように日常生活で何か事を起こす場合、陰陽師に占ってもらい決定するといった慣行は、今日でも、全くすたれているとは言いきれないであろう。科学的知識や合理的思考が進んでいない当時としては、やむを得ないものであった。戦時中、「コックリ（狐狗狸と当て字）さん」という占いがはやった。三本の箸で盆を支え、祈禱をして盆の動き方で吉凶を占う遊びであった。

(三) 干支（えと）——十干と十二支

陰と陽の結びつきによる「五行」とは、何を指すのであろうか。

それは古代の易学から出た摂理で、五行とは天地の間で循環流行してやまない火・木・土・水・金の五つの元氣（万物組成の元素）を指す。

この五行が相互に連なって対立すると、ときに「相生」（あいしょう）、ときに「相剋」（あいこう）となる、と考える。結婚に例をとれば、男女の相生が良ければ円滑

な家庭を、相性が悪い（相剋）と破談になると考えた。

このように、五行の組み合わせで「十干」と「十二支」が導かれる、とした。この易学は宋の時代（殷王三二代のあと滅亡、紀元前二八六年）に発達した。

・ 十干——甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸
・ 十二支——子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申
・ 酉・戌・亥

中国で十二支のそれぞれに獸を充てたことも、ご承知のとおり。今日、日本で一般に広く残っているのが、この暦法による慣習であろう。この「十干」と「十二支」は、律令国家で年・月・方角・時刻などに当てはめられて活用された。たとえば、一日二十四時間は二時間ごとに刻み、次のように定めた。

・ ネの刻Ⅱ午前〇時 ・ ウシの刻Ⅱ午前二時 ・ トラ
の刻Ⅱ午前四時 ・ ウの刻Ⅱ午前六時（以下略）

平安時代も末期になると、陰陽道の暦法は広く庶民に普及したが、のちに年をおって神秘化された。これらの

思想信仰は、元来「招福除災」を目的とすることから、日本伝来の神祇信仰（祖先神崇拜）と結びつき、天祖祭（天皇家の祖先祭）、追難祭（大晦日の夜、悪魔を払い、疫病などを除く儀式）をはじめ、各種の神社のお祓い神事に結びついた。

(四) その他—六輝（六曜）のことなど

中国は三、四千年の昔から、暦や星の研究がなされた。もっとも、中国だけではなく、古代エジプトやバビロニア王朝時代（メソポタミヤ文明）でも同様であった。

このような人類の新知識は、中国大陸との交流が開かれてからわが国にも伝わり、大和朝廷の国づくりや當時の人たちの信仰に深い影響を及ぼしたのである。

詳細に述べる余裕はない。中国の暦本（中段、下段、暦注）に出ている主要な事項のみ次に掲げてみる。

・天象　・七曜（一週間の暦法）　・干支（えと）

・潮汐（海の潮の干満）　・二十四節気（春分・秋

分など各季節を分ける）

・星座（九星）　・選日

（吉凶の日選び）　・十二直（日々の吉凶、生活の指針）

・二十八宿　・六輝　・その他

この中で、暦法に示されている「六輝」（または「ろくき」）のみ採り上げてみよう。

—これは、結婚式の日に「大安（吉日）」を選んだり、「友引」の日の葬式を一日延ばしたりする選日の、それである。

大安と仏滅（仏の入滅の日で、俗に万事に「凶」の悪日として嫌われた）を除けば、次のとおりである。

・先勝（俗に「せんかち」とも）　　|| この日の午前に行えば「吉」、午後は「凶」、急いで行えば「吉」

になる。

・先敗（同じく「せんまけ」）　　|| この日の午前には

「凶」、平成を守って行えば「吉」になる。陰陽道では、公事や急用は忌む日とされた。

・友引　|| 朝晩は「吉」、昼は「凶」である。この日、行えば「友を引く」として葬式などで嫌われた。

もちろん、俗信である。

・赤口（同じく「あかぐち」） 〓この日は「大凶」の日で凶滅に同じ。公事や訴訟、契約の締結などは避けた方がよいとされた。

このような「選日」の慣行は、今日なお生きている。神の意思にたよる“神だのみ”は、神社詣での際の「おみくじ」（御神籤）の運勢占いに残っている。

（五）漢字の起源

現代の日本で日常に使われている文字は、漢字を中心に平カナと片カナである（英語は除く）。なかでも、漢字の起源については、興味を呼んでやまない。

今より、ざっと三千数百年前、中国で殷王朝の時代、すでに漢字の祖先ともいえるべき「甲骨文字」が作られていた、と伝えられる（『古代文化の発見』）。

人類が文字をもって言葉を表わすようになった歴史も古い。一番早くはシュメール王朝（紀元前三千年頃、メソポタミア地方に都市国家を建設）時代の楔形文字。これにつづき、古代エジプトの象形文字、インダス文明

（インド）の文字と言われてきた。

この中国の「甲骨文字」は元来、一字で一つの観念を表わす表意文字である。たとえば、野生の「虎」や「豹」に見られる（図参照）ように、各動物の特長をよく捉え生き生きと表現するところに特徴が見られる。

これらの文字が彫られたのは、主に亀の甲（占いの道具に用いられた）であったことから、名付けられた。清朝時代、殷の遺跡から発見された。

中国漢字の古体としては、秦の始皇帝が中国統一（前二二一年）後に制定したのにつづき、漢代の常用文字であるレイ（隸）書で整えられた。これらは、南北朝時代（四二九〜五八五年）を通じて、しだいに普及した。の



甲骨文字のいろいろ

ち唐時代(六一八〜九〇七年)になって、現代の漢字の正字である楷書かいしよ体が確立した、とされる。

こうして甲骨文字の象形と指事(注、事柄の数など抽象的概念を象徴的に記号化した文字。「一」「二」「上」「下」「本」の類)から発達を見たまま「漢字」が現在も使われているのは、中国を除いては日本、朝鮮、ベトナムだけである(漢和字典解説)。

その字体にテン書・レイ書・楷書・草書等があり、現在中国では、多くの簡体字(略体)が用いられている。象形文字の「女」を例に取ってみよう。―その解字は、胸の前に両手を組んだ、しなやかな女性の姿を表わす。「姑」はしゅうとめで、夫又は妻の母。「姓」はかばねうじ。「嬭」は、たおやか、しなやか。「婢」は、はしため。「嫁」は、よめ。女扁の以上の文字には、その表意するところ、古代中国の女性軽視(男尊女卑)の思想が秘められているように思われる。(つづく)

参考引用文献

・上田正昭著『日本神話』(岩波新書)

- ・村上重良著『國家神道』(同右)
- ・倉野憲司 校注『古事記』(岩波文庫)
- ・湯浅泰雄著『日本人の宗教意識』(講談社学術文庫)
- ・宮家準著『日本人の民俗宗教』(右同)
- ・田村圓澄著『仏教伝来と古代日本』(右同)
- ・豊田国人著『日本人の言霊思想』(右同)
- ・早川庄八著『天皇と古代國家』(右同)
- ・所 功 著『伊勢神宮』(右同)
- ・大林太良著『神話の話』(右同)
- ・斉藤忠著『日本人はどこから来たか』(右同)
- ・大野晋著『日本語の起源(新版)』(岩波新書)
- ・阿部正路監修『日本神様事典』(日本文芸社)
- ・鎌田東二著『神と仏の精神史』(春秋社)
- ・新谷尚紀編著『民俗学事典』(日本実業出版社)
- ・近代日本文化論(九)『宗教と生活』(岩波書店)
- ・岡田米夫著『神社』(東京堂出版)
- ・富米隆著『卑弥呼』(学生社)
- ・『宗教学辞典』(東大出版会)
- ・『哲学事典』(平凡社)